

Translation 1

富樫倫太郎

陰陽寮  安倍晴明篇

道兼の後継となる関白に誰を指名するかということについては、一条天皇と女院との間に激しいやり取りがあったと言われている。

道隆の後継の関白を指名するに当たっては、元々、一条天皇としては、

(関白には伊周を)

という腹積もりであったのを、

「関白職は兄弟順にという法興院様の御遺言に従わねばなりません！」

という思いがけない女院の猛反発を受け、女院の勢いに押されてたじたじとなった一条天皇が譲歩した、という経緯があった。

今度はそうはいかない。

一条天皇は、

(ならば道兼の後に伊周を関白にしよう)

と心に決めていた。

中宮・定子にもそう約束していた。

だから、道兼が亡くなった後、女院が急遽参内してきたと聞いたときも、

(さては、道長を関白に推す積もりだな。今度ばかりは、素直にはうなずくまいぞ。伊周を関白にする)

と一条天皇は、満を持して女院を待ちかまえていたとあってよい。

女院と対面した一条天皇は、関白職は兄弟順でなければならぬという女院の説得に辛抱強く耳を傾けはしたものの、決してうなずきはしなかった。

頑固に口を閉ざし、女院がしゃべり疲れた頃合いを見計らって、

「関白には内府を任ずるつもりです」

と一条天皇は通告した。

まさに、これは通告であった。

女院の助言は必要ない、関白は自分で任命する、という一条天皇の強い意思の表れであった。

十五歳的一条天皇がついに自立の道を歩み始めたのだ。本来ならば、母である女院は喜ぶべきであったろう。

しかし、このことばかりは譲れない。

何しろ女院は、連日連夜、晴明の遊夢欺眠の術によってたぶらかされており、関白職を兄弟順に譲るといふ兼家の遺言を守らなければ、兼家が極楽往生できないばかりか、自分も

不幸になり、やがて藤原氏北家も衰亡すると信じ込んでいるからだ。

女院は一条天皇を翻意させようと、再び滔滔（とうとう）とまくしたて始めた。

さすがに天皇もうんざりしてきた。

一条天皇が女院を敬い尊ぶ気持ちは変わらないものの、出家した女院が政に口出しして唾を飛ばすような姿は見たくなかった。

御簾の向こうにおられる一条天皇は、そっと席を立った。

気配で察したのであろう。

「お待ちあれ！」

女院が血相を変えて、後を追った。

席を立った天皇の後を追うなどというのは、大変な非礼に当たる。

臣下がこんなことを為したならば、ただではすまないであろう。

しかし、相手は母である女院だ。

側近たちも手を出しかねて、顔をそむけた。

女院が天皇の袖を引いた。

（やれやれ）

溜息をつきながら、一条天皇が振り返った。

（ひっ）

天皇は息を飲んだ。

女院は、恐ろしい形相をしていた。女院のこのような表情を目にするのは、初めてのことであった。

「このようなことを申し上げるのも世の中のため、お上のためと思えばこそでございます。決して、自分のために言うのではございませぬ。この身は地獄に墮ちようとかまわないのでございます。ただただ、この世の平安だけを願っておるのでございますよ。それがおわかりにならないのですか？ それがおわかり頂けないならば、あまりにも情けなく嘆かわしく思われますので、もうこれ以上生きている甲斐もありません。たった今から、食を断ち、すぐにでもこの命の灯を消すこととございましょう……」

瞬きもせず、じっと我が子を見つめたまま、女院は静かに語った。物言いは穏やかだったが、その内容は凄まじい。言うことを聞かなければ自殺する、と脅かしているのだ。

血の気の引いた真っ青な顔で、一条天皇は、

「もうそれ以上、おっしゃいますな。女院がよかれと思うように致しましょう。ですから、二度とそのようなことをおっしゃいますな」

と言ったが、その声は微かに震えていた。

五月十一日、関白の宣旨が権大納言・藤原道長に下った。

道隆が亡くなってから道兼に関白の宣旨が下るまで十七日もかかったことに比べると、道兼が亡くなってからわずか三日後に宣旨が下ったのは異例の早さと言えよう。

政権を掌握した道長は、直ちに除目を行った。

昨年来、数多くの高位高官が病で亡くなっていた。

その欠員を埋めるための除目である。

言うまでもなく、道長の息のかかった者たちが、優先的に官位を進められたのである。

陣定を構成する公卿たちも道長派が多数を占め、旧道隆派とでもいうべき伊周派は少数派に転落した。

宣旨を受けてから数日にして、道長は政権基盤を確立させたといってよい。

新しいメンバーたちを交えた第一回の陣定を終えた道長が牛車に乗って、内裏を後にした。牛車には信頼が同乗している。

「無事に終わりましたな」

信頼が話しかけた。

心なしか、信頼の口元が緩んでいる。笑いを堪えきれないといった様子だ。それもそのはずで信頼は、道長が取り仕切った除目によって、一躍参議から権中納言に出世したのである。嬉しくないはずがなかった。

「うむ」

道長の返事は素っ気なかった。顔色も悪いようだ。

(疲れておられるのかな?)

ここ数日の道長の忙しさをよく知っている信頼は、そう思った。

勿論、側近である信頼も道長の側を離れずに、何日も徹夜をしたのだが、多くの事柄に最終決定を下さなければならない道長と、単に自分の意見を述べるだけの信頼とでは責任の大きさが違う。

道長の顔色の悪さを、

(ご心労が重なっておられるのだな・・・・・・・・)

と信頼は解釈した。

とりあえず、除目も終え、最初の陣定も無事に終えた。この後、道長は宇治の別荘で数日静養する予定になっている。

(それで疲れも取れるであろう)

と信頼は期待した。

そのときだ。

道長の苦しげな呻き声が聞こえたのは。

目をつむって居眠りしているのかと思っていた道長が、額に脂汗を浮かべ、腹を押さえて唸っているのだ。

「殿、殿！ どうなさいました！」

信頼が転倒した道長を助け起こしたが、道長は歯をがちがち鳴らしながら、唸り声を発す

るばかりで何も答えない。

信頼は慌てた。

（あのときと同じだ！）

先月、道隆が亡くなる前、やはり道長は今と同じように庭で倒れてもがき苦しんだではないか。

あのときは、清明と寿宝が一緒だった。

信頼は簾を上げると、

「急ぎ、土御門第に戻るのじゃ！」

と車副いに命じ、更に、

「その方、安倍清明殿の屋敷に参り、急ぎ土御門第に来られたい、と申し伝えよ」

と隨身に命じた。

苦しむ道長を乗せた牛車が一路、土御門第に向かった。

「いかがでございます？」

清明が道長に訊いた。

「うむ、だいぶ楽になった」

道長は体を起こそうとしたが、

「無理をなさってはなりません。今少し、横になっていた方がよろしいでしょう」と清明が勧めたので、道長は体を横たえた。

「どうなのだ、殿のご容体は？」

信頼が心配そうに身を乗り出した。

清明はうつむいて思案している様子だった。

信頼の知らせを聞いて、すぐに清明は寿宝を連れて土御門第に駆け付けた。

清明がやって来たときも、まだ道長はもがき苦しんでいた。

遠からずこんな日が来るであろうと予期していた清明は懐から煎じ薬を取り出し、道長に飲ませた。

薬草を煎じて練り合わせた鎮痛作用のある薬であった。

その薬が効いて、道長の腹部の痛みが一時的に治まったのだ。

が、薬が切れれば、また痛みが襲うであろう。

その度に、薬を使っていたのでは、やがて薬も効かなくなる。

道長の苦しむ様子を見れば、病状は悪化しているようだ。

これ以上、真実を告げることを遅らせてはならない、と清明は決断した。

しかし、清明が口を開く前に、道長が、

「遠慮せずに言うがよい。そんなに悪いのか？」

と訊いた。

「さようでございまする」

晴明がうなずいた。

「やはり疫病神に崇られているのか？」

信頼が晴明を見た。

「そうではございませぬ。疫病神が殿に取り憑いたわけではなく、痛みの原因は殿の腹にできているその膨らみでございまする」

「腹の膨らみ？」

信頼が道長の腹部に視線を落とした。

「ちょうど臍の上のあたりにしこりがあるはず。しかも、日々、大きくなっているはずでございます。このまま放っておくと、そのしこりは更に大きくなり、ついには殿のお命を食い尽くしてしまいましょう」

「あと、どれくらい保つのだ」

道長が天井を見つめたまま、訊いた。顔色は青ざめているものの、声は冷静である。

「三月（みつき）保てばよい方かと」

「三月だと！ 馬鹿な！ 何を言うのか！ 殿のお命があとたった三月しか保たぬというのか？」

信頼は動転した様子で、大きな声を出した。

「残念ながら、それが真実でございまする」

「そうか・・・・・・・・」

と、つぶやいて道長は目をつむった。

「力を落とすことはございませぬ。殿のお命を食い尽くしているそのしこりさえ取り除くことができれば、お命は保ちましょう」

「おお！ ならば、そうしてくれ。晴明殿の方術によってそのしこりを取り除いてくれ」

信頼が晴明に詰め寄った。

「方術でどうこうできることではございませぬ。施術を為さねばなりませぬ」

「施術とは？」

信頼が訊いた。

「体の中に入り込んだ異物を取り除くには、皮膚を切り、中にあるものを取り出さねばなりません。そのしこりは腹にありますれば、殿のお腹を切らねばなりません」

「な、なんと！・・・・・・・・」

信頼が絶句した。

そんなことをしたら、それこそ死んでしまうではないか、と言いたかったが、さすがに口に出すことを憚った。縁起の悪いことは、なるべく口に出さないというのが貴族社会に生きる者の慎みであった。

「殿」

晴明は道長に呼びかけた。

「まろを信じてはいただけませぬか？ 施術が一日遅れば、しこりがそれだけ大きくな

り、殿のお命を蝕（むしば）むことになりまする」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

道長は目をつむったまま、何も答えなかった。

Translation 2

高橋克彦（たかはしかつひこ）

ドールズ

医大の救急センターは市内の中心にある。

ドールズからは川を挟んで目と鼻の場所だ。車で四、五分。それでも恒一郎にはもどかしかった。伝言には真司の一人娘の怜（れい）が事故に遭ったとあるだけで詳しい状況がわからない。逸（はや）る思いで乱暴にコーナーハンドルを切る。怜は自分にとってもたった一人の姪（めい）だった。

真夜中でも救急センターは眩（まぶ）しいほどの照明に溢（あふ）れていた。カクテルライトに浮かぶ駐車場には何十台もの車が雪を被っている。今夜は事故も多かったのだろうか。車から降りて恒一郎は走った。激しい雪が頬（ほお）を打つ。

<怜。死ぬなよ>

入り口で訊（き）くと怜の居場所はすぐにわかった。突き当たりの角を曲がって二番目の集中治療室。やはり重傷なのだ。

うすら寒い廊下のベンチには真司が腰かけて自分の吐きだしたタバコの煙を憔悴（しょうすい）しきった感じで眺めていた。こんな姿は珍しい。奇麗に刈りこんだ口髭（くちひげ）に短くなったタバコの火がつきそうだ。近づくスリッパの音に俯（うつむ）いていた顔を上げる。恒一郎を認めると真司はホッとしたように小さく頷いた。もともと細い目が落ちこんでいた。頬に血の気もない。

「どうしたんだ。怜は？」

「車に轢（ひ）かれた。骨折のほうは大丈夫らしいのだが、脳波に少し異常があったみたいで検査に手間どった。今は注射で眠っている」

「脳波？ それは心配だったな」

それでも骨折だけと聞いて安堵（あんど）した。

「義兄（にい）さんはいつからここに？」

「十二時頃かな。店のほうにおふくろから連絡が入った。それからズツといるよ」

「十二時？ それじゃ昼の話なんだ」

大規模な古書のセリが仙台であって恒一郎は朝から店を留守にしていた。

「まさか。さっきの十二時さ」

「冗談だろ。怜は七つだぜ。そんな真夜中にどうして子供が事故に遭うんだい。どこかにでかけていたってわけでもないんだろ」

「そのあたりは、よくわからない・・・・・・おふくろの話じゃ寝ぼけて外に飛びだしたところをハネられたと言うんだけどな」

真司の口調にも戸惑いが見られる。

「この雪の中にか・・・・・・・・信じられないね。怜には前からそんな寝ぼけ癖があったわけ？」

「いや・・・・・・・・きつとはじめてだと思う」

どうにも状況が曖昧（あいまい）だ。

「中には入れるのかな」

恒一郎の言葉に真司は立ち上がるとドアをソッと押し開いた。機械に囲まれたベッドの側には看護婦がいて点滴薬をとりかえている。

「義弟（おとうと）です。構いませんね」

看護婦が口唇に指を立てて顎（あご）を引いた。恒一郎は足音を忍ばせて怜の寝ているベッドに近づいた。毛布がテントでも張ったように円く膨らんでいる。かわいそうにコルセットでもつけられているのだ。その上、頭皮には何本もの電極コードが貼りつけられていた。真上のブラウン管にそのコードを通じて怜の脳波らしきものが映っている。めくられた毛布の下から頼りない裸の胸がのぞいた。寒いのか全体に鳥肌が立っている。心臓のあたりにもコードが見えた。こちらは心電図だろう。怜は疲れて眠っている、ように思えた。恒一郎は顔を寄せて怜のか細い寝息をうかがった。薄い瞼（まぶた）がピクピク動いた。人の気配に気がついて怜は静かに目を開いた。目が合う。

「わかるかい。オレだよ。痛むか？」

ぼんやりと恒一郎を見上げる怜の瞳（ひとみ）が次第に恐怖の色に変わった。悲鳴を上げようとするのだが声がでないらしい。瞳孔（どうこう）も完全に開いている。恒一郎は狼狽（ろうばい）して怜を見詰めた。

「怜ちゃん・・・・・・・・どうしたんだ」

その腕を真司が後ろから押さえた。

「ショックがまだ残っている。戸崎（とぎき）がさっき診察していった。一時的な失語症に陥っているらしいんだ。二、三日もすれば・・・・・・・・」

「こっちの話は聞こえているのかい」

怜はまだ怯（おび）えた視線を恒一郎に浴びせている。まるで他人を見る目だ。痛々しい気分を襲われた。小さな子供に失語症とは惨（むご）い。轢かれたときの恐怖がよほど強かったのだ。

「ようやく恒ちゃんのおでましか」

背後から戸崎昭（あきら）の聞き慣れた低い野太い声をした。真司のバンド仲間の一人で現在はこの大学病院に勤務している。真司とは対照的に太った腹をしているが、気のいい男だ。間もなく四十だというのに笑うと童顔になる。

「心配するな。骨折のほうは三週間も我慢すれば元気に歩けるようになる。問題は失語症だけど・・・・・・・・それも大丈夫だろう。緊張で声帯の筋肉が動かなくなっただけだ」

戸崎は脳波をチラッと眺めた。看護婦に状況を聞く。どうやら怜の様子を見にきただけらしい。恒一郎と真司は病室をでた。

「助かったよ。戸崎も店にきていたんだ。それで手配もテキパキとやってくれてな」

「なるほど。おかあさんは？」

「とっくに帰らせた。入院が長引きそうなので今頃はその準備をしているだろう」

「はねたヤツは警察か？」

「轢き逃げさ。警察も必死に捜している」

真司は肩を小刻みに震わせた。

「ひどい話だな」

戸崎が治療室から姿を現わした。

「少し落ち着いた。もうじき眠るだろう」

安心させるように白衣のポケットを探って真司にラークを勧めた。体つきの割に華奢（きゃしゃ）な指先だ。これならメスの扱いも上手（うま）いに違いない。恒一郎も一緒にタバコをとりだして火をつけた。

「しかし……人間ってのも不思議なパワーを持っているもんだ。普通なら一歩も前に進めないはずなんだがね」

「どういうことです？」

「怜ちゃんさ。あれだけ大腿骨（だいたいこつ）が折れていれば歩くこともできやしない。なのに、おかあさんの話だと走って家に戻ってきたと言うんだろ。本人は骨折の自覚もなかったんだな」

恒一郎は真司を見据えた。

「それでおふくろも怜の怪我にしばらく気づかなかつたらしい。濡れた体を拭（ふ）いて寝かしつけて、二時間ほどしたら怜の部屋から呻（うめ）き声がしたんで起きてみたらこの通りだ」

「バカな……じゃあ二時間も怜が痛みを我慢していたってのかい。有り得ないぜ」

ちょっと指を切った程度で大げさに泣き声をあげる子だ。決して強い子供じゃない。離れた部屋に一人で寝ているから泣いても声が届かなかったのだろうか。

「本当だよ。痛みを越える瞬間的な衝撃には神経のほうがマヒしてしまうらしい。おふくろは気にして隣の部屋にいたんだ。また飛びだすんじゃないかと思ってさ。」

真司の答えに戸崎も頷（うなず）いた。

「ウィンドーの外にだしていた腕を対向車のダンプに千切りとられて……それでも十分ばかり気づかずに運転していたヤツもいるからね。実際にここに運びこまれてきたよ」

恒一郎はゾクッと寒気を覚えた。

「それとおなじさ。怜ちゃんの場合は体重が軽いからなんともなかったんだろう。それに、すぐ布団に横になったのも関係ある」

戸崎は自分に言い聞かせるように言った。

「脳波がおかしいって聞いたんだけど」

恒一郎の問いに戸崎は逡巡（しゅんじゅん）した。

「不安定なことは確かだ。異常な緊張が続いている・・・・・・振幅が小さくて振動数が多い。ヒステリー状態が直らないって言えばいいかな。もっとも、事故に遭えばだれでもそなるさ。外傷が原因じゃないから明日には元に戻るはずだ、と思う。よほど神経が繊細な子供なんだね。眠っていても動揺が治（おさ）まっていない」

「失語症と関係あるのだろうか」

「わからん。前に脳波の検査でもしていれば比較もできるんだけど・・・・・・」

曖昧（あいまい）に言葉を濁した。恒一郎はその瞳の奥にある動揺を見逃さなかった。戸崎は口唇を歪（ゆが）めて煙をフッと空（くう）に飛ばした。

Translation 3

京極夏彦（きょうごく なつひこ）

鉄鼠（てっそ）の檻（おり）

京極堂の仏頂面を目にして、これ程の安心感が得られるとは——正直私は思ってもいなかった。

彼の憑物落しの作法は善く知っている。

私は、幾度も向こう側に行きかけて、この男に引き摺り戻された。境界でふらふらと揺れている者がいると、この友人は不機嫌な顔つきで音もなく近寄って来て、ある時は背中を押し、またある時は腕を強く引いて、収まるところに収めてしまうのである。

今回に限り私はそう言う状態ではない——つもりだった。

私は、主体性も目的意識もないまま、流されるように関わってしまった、ただの第三者でしかなかったからだ。

しかしそれを云うなら鳥口にしたりして敦子にしたりして同じことで、云ってみれば他人の不慮の事故に遭遇した旅行者程度の関わり方でしかない。己の深い部分と今回の事件が有機的に結びついているのは精精（せいせい）飯窪女史だけであり、それにしたりして根拠は甚（はなは）だ薄弱だ。いわくありげなお膳立てこそ整っているものの、殺人事件そのものとは関わりがあるかどうかは解らない。今川とて同じことだと思う。

それにも拘（かかわ）らず、私達は一様に安堵した。

敦子も鳥口も、初対面の今川や飯窪も、である。

友人は眉根を寄せて、芥川龍之介のポートレートよろしく、顎に手を当てた得意のポーズで仙石楼の座敷に座っていた。そして私達の顔を見ると一層不機嫌な表情になり、ひと言、「この粗忽者（そこつもの）どもが」

と云った。

何も云われないよりは遥かにマシだった。

続いて益田達刑事に囲まれるようにして桑田常信和尚が座敷に這入（はい）って来た。

怯えた禅僧はそれなりの威厳を精一杯の努力で保ちつつ、凶らずも黒衣の陰陽師と対峙することとなった。

何時間か前。

否、あれは僅（わず）か六時間程前のことだ。

寝ている鳥口を無理矢理起こし、私達が禅堂に移動したのは夕方五時頃だったと思う。

禅堂の中を覗いた瞬間の得も云われぬ感動を——大袈裟な云い方だが——私は生涯忘れないだろう。

音がなかった。気配もなかった。しかしそこには大勢の人間が座っていた。

入口には警備の警官が一名立っていた。勿論番兵は無駄口を利く訳でもなく、直立不動の姿勢を崩す訳でもなかったのだが、どうにもいけなかった。通常折り目正しく見える制服の公僕も、禅堂の中では何だか俗っぽい——妙ちきりんな異分子に過ぎなかった。警官ですらそうなのだから、私達などは最悪の闖入（ちんにゅう）者である。張り詰めた空気の中に私達のような不屈き者の居場所などは最初（はな）からなかった。声を出すことも儘（まま）ならず、腰掛ける訳にも行かなかった。私達は部屋の隅に申し訳なきように佇んだ。

暫くするとひとりの僧が戻って来て、入れ違いにひとりが出て行った。どうやら僧達はひとりずつ順に事情聴取に呼ばれているらしかった。

入って来た僧は無言で己の座る場——単（たん）——の前に立ち、深く礼をして回れ右をし、再び礼をして後ろ向きのまま片足ずつ単に上り、座った。右足を左股に、左足を右股にのせ、前後左右に軽く軀を揺すり坐相を整える。半眼になり、呼吸を整えて後はもう微動だにしない。

集中しているのか。

拡散しているのか。

どちらでも——ないのだ。

禅は集中力を養うと誰かが云っていた。

或いは一種の瞑想法であるとも聞いた。

それはまるで違うと思った。

坐禅は命懸けの修行であると云う人もいる。

それ程気負ったものではないと云う話も聞いた。

それは両方中（あた）っている気がした。

何の気負いもなく全人生を賭けて座る。

潔（いさぎよ）い。いや、潔過ぎる。大きな気負いを以て臨まなければ瑣事（さじ）ですら熟（こな）せず、その癖人生を賭けるどころか僅かなリスクを負うことすら嫌う——私などにはとても勤まるものではなかった。私の人生は常に緊張感に欠けているのみならず、それでいて尚、漠とした不安に覆われてばかりいるのである。まるで正反対である。私は灰昏（ほのぐら）い禅堂の静寂の中に身を置いているだけで、どうにかなってしまいそうだった。

警策を胸に翳（かざ）した祐賢和尚が静々と僧達の間を行き来している。動くものと云えばそれだけで、私は無意識のうちに祐賢の動きに視線を合わせていた。光量に乏しい堂内では僧の識別は難しい。尤（もっと）も私は慈行と祐賢、そして案内をしてくれた英生と托雄、巨漢の哲童ぐらいしか判らないのだから、明るかったとしてもそう変わらなかったかもしれない。

昏沈（こんじん）——睡魔に襲われた場合や、心の乱れが見て取れるような場合、坐禅中の僧は警策で打たれる。

見ていられなかった。

早朝の取材の時もそうだった。

朝課も行鉢（ぎょうはつ）も平気だったのだが、坐禅の取材に到って私は堪え切れなくなり、ひとりこの禅堂を出たのだった。

敦子に坐禅の何たるかを問われたところで答えられる筈もなかった。

そして再び、禅堂に漲（みなぎ）る緊張感とうんざりするような重圧感が云い知れぬ斥力（せきりょく）となり、私を外へ押し出そうとしていた。

それに加えて、堂内はかなり冷えていた。外気温と変わりがない。烏口はまだ赤い目を擦っている。道道事情は説明したが、未だ寝惚（ねぼ）けているようだ。

敦子は寒そうに己の肩を抱き、飯窪は寔（やつ）れた目で僧達を順に見渡していた。

僧がひとり戻って来た。私は入口に目を遣る。見張りの警官の足が小刻みに震えている。寒いのだ。その微（かす）かな振動こそが、彼を僧達と分かち、俗界に貶（おとし）めている原因なのだと私はその時漸（ようや）く知った。

早く外に出たかった。

そんな状態が一時間半も続いた。

飯窪は倒れかけて敦子に支えられ、結局しゃがみ込んだ。烏口は早々と機材を入れたケエスに腰を下ろしている。立っているのは私と今川だけである。

今川は放心しているように——その時の私には見えた。

突然（いきなり）乱暴な風が吹いて、入口から粗暴な輩（やから）が粗野な音を立てて侵入して来た。数人の刑事と警官達だった。応援の捜査員が到着したのだ。

我我は表に出され、隣の小さな建物に移された。

しかし居心地が悪いのに変わりなかった。

ほんの少し暖かくなっただけである。

視覚的に遮蔽されたと言うだけのことなのだ。隣の建物に大勢の僧が座り続けていると云う現実には、捨て去ろうとしても捨てられるものではなかった。例えば箱の中に何か得体の知れぬものが入っているとする。幾ら蓋が開かぬから大丈夫だと云っても、それを手に持っているのは却って厭だろう。何か入っていることだけは確実に判っていて、見ることでできぬ状態と云うのは、余計に不安を煽動する。

そんな気分だった。

勿論隣の大きな箱の中身は得体の知れぬ厭なものなどではなく、清浄なる修行僧の群れなのだが。

事情が判っているのかどうか怪しかったが、若い警官がひとり私達を見張るために室内に残った。外にもひとりいるらしい。その所為と云う訳でもないのだろうが口を利くものは居らず、座っている体勢を変えるのすら気が引けた。畳と衣服の擦過音が耳につくのである。

聞こえるのは遠く木木の騒めく音ばかりである。

山間を冬の夜風が渡って行くのだらう。

否。あれは――。

「何か――」

敦子が気づいた。

「――声が聞こえませんか」

「ん？」

上（あが）り框（かまち）に腰掛けていた警官がその言葉に反応して少し顔の角度を変えた。耳を澄ましているのだ。

「風じゃないすか」

烏口がそう云ったので警官は安心したように元の形に戻った。しかし。

それは風ではなかった。

坤（うめ）き声――木の軋（きし）るような音。啜（すす）り泣きか。あれは――。

あれは鼠――か？

「いいえ。聞こえるのです。あれは声なのです」

今川が云った。

「うん――？」

警官が腰を上げて戸を開けた。

「おい君、異状ないか？」

「ないよ」

外の警官が素っ気ない返事をした。

「何か聞こえるか？」

「さあ。静かなもんだが」

警官は我我をちらりと盗み見た。

「そうだ――よなあ」

「丁度良い。寒い。君、交代してくれ」

「中も変わらないぞ」

「少しはマシさ」

外の警官が這入って来た。

その背後の闇にすうと白い影が過（よぎ）った。

鈴――だ。

私以外、誰も気がつかなかっただらう。

更に一時間程して、益田がやって来た。

Translation 4

有栖川有栖（ありすがわありす）

46 番目（ばんめ）の密室（みっしつ）

第一章 密室の巨匠

定員二百人ほどの階段教室はおよそ五割の「入り」だった。十二月二十四日という時期、しかも一講目だということを考えればますますの人気ではないか、と思う。私は最上段のドアのすぐ近くに腰を降ろし、壇上の友人を見た。細いネクタイをだらしく緩（ゆる）めた助教授は椅子に浅く掛け、頬杖をついて講義中だった。

「当然のことながら犯罪学は科学でなくてはならない。酸鼻（さんび）を極めた事件を収集してそれを皿に盛りつけ、常識という粉末を振り掛けてすむのなら、こんな楽なことはない。しかし犯罪学がもしそれだけのものだったとしたら、誰がわざわざ学ぶ必要がある？ 利口ぶった人間はプロ野球や映画の評論家をしばしば馬鹿にするが、犯罪学はそれよりさらに低い地位に甘んじなくてはならないだろう」

いつもの彼らしいクールな口調だった。まだ頬杖を突いている。初めての者が聴けば、この若い助教授はよほど与えられた仕事が気に入らないか、よほど不機嫌なのかのどちらかだとも思えるかもしれない。だが、実際はそのどちらでもない。——彼は眠いのだ。

「が、だからと言って訳知り顔に科学者ぶるのも危険なことだ。人の心の闇に踏み入ることの困難さを、疑似（ぎじ）科学をもって回避した気になることこそ愚かだ。例（たと）えば——君たちは生まれつきの犯罪者というものを信じるか？ あるいは犯罪者の気質は遺伝すると考えるか？」

学生たちの顔をひと渡り見回す。その途中で私と目が合ったが、彼はさりげなく私を無視した。

「犯罪者は先天的に犯罪者だ、などという考えは偏見に過ぎないと思う者もいれば、それは時として充分にありうると考える者もいるだろう。私たちはロンブローゾやフートンの生来性犯罪人説を乗り越えてきた。犯罪者の多くの鼻は傾いているだの、額が狭いだのという欺瞞（ぎまん）に満ちた——極めてサンプルが少なく恣意（しい）的な——統計を嗤（わら）った。しかし、犯罪者は生来のアウトサイダーであり、怪物なのだという考えは多くの人間にとってよほど魅力的であるとみえるから、君たちの中に生来性犯罪人説を本心から否定しかねている者もいるだろう。そんな論者は巧みにサンプルを収集してくるものだ。——ジューク一族について知っている者は？」

誰も応えなかった。彼は若白髪（わかしろかみ）の多いぼさぼさの頭をぼりぼりと掻く。

「西村寿行（にしむらじゅこう）の『血（ルジラ）の翳（かげ）り』を読んだのもいないわけか」

助教授は妙なことを言った。推理作家の端くれである私もその作品は未読だった。何か面白い話になりそうな予感がして手帳を開く。

「一八七七年にアメリカの学者リチャード・ダッグディルがある研究を始めた。犯罪者には犯罪性ともいべき因子が備わっており、それは遺伝するのではないかという仮説をたててそれを立証しようとしたんだ。彼はジュークという犯罪者をサンプルとして選び出し、その家系を遡行（そこう）するうちに驚くべき事実と直面した。百二十五年前の祖先まで遡（さかのぼ）って調査したところ、ジュークの血族および姻族（いんぞく）およびその同居人——トータルで千二百人ほどになるはずだ——のうち、ダッグディルは血族五百四十人、姻族もしくはその同居人百六十九人をつきとめた。この七百九人はいかなる生活を送っていたのかというと、犯罪者だった者七十七人、ヒモや情婦となって性的に墮落、逸脱した者二百二人、乞食（こじき）になったり養護施設に収容された生活破綻（はたん）者百四十二人という結果だった。縮めて四百二十一人の問題児がいたということになる。これは彼が発掘した子孫のうちの五十九%、推定される子孫千二百人のうちの三十五%に相当する。尋常な数値ではない。見よ、犯罪は血を伝って受け継がれるのだ、とぶち上げたんだな。ジューク一族は森の人間と呼ばれ、劣悪な生活環境の中で近親婚を繰り返していたという。そのために濃密な悪の血が保持されたというわけだ。また一説には、州政府がこの一族のために費やした金は一八〇〇年代前半だけで百三十万ドルに及ぶという」

私は細かい数字——助教授はもちろんメモを見ながら話した——をメモした。講義を聴きに来たわけではなかったのだが。

「同じフィールドワークの結果だとしてもロンブローゾが唱えた説よりはこちらの方が説得力がありそうだな、と思ったか？　ところが落とし穴がある。一八七七年から百二十五年の歳月を遡ったとすると、ダッグディルは一七五二年にまで調査の手を伸ばしたことになる。さて、そんな長い手が持てたものかな？　十八世紀のアメリカにおいては官庁や裁判所の文書などまるで整備されていなかったはずだ。彼の調査結果には大いに疑問の余地がある。一九〇七年にエスタブルックという研究者がダッグディルを受けてその後のジューク一族を調べたところ、犯罪者の発生率は半減していたという。そもそも血のつながりがない姻族や同居人を含めてしまうところに調査の乱暴さが表れている。犯罪は生物学的に遺伝する、という仮説と矛盾しているものな。かくしてダッグディルの『ジューク家の研究』なる報告は失速し、迷信という箱に投げ捨てられた」

私はメモをとる手を止めた。迷信を学んでも仕方がない。

「しかし、今なお、犯罪者の染色体に常ならざる点はないかと顕微鏡を覗いている研究者がいる。人は犯罪者という怪物——異郷の国の住人に尽きない興味を覚えつつ、自分たち『正常者』とは違う存在なのだという科学的な根拠を欲しているということだな。

余談が長くなったが、私が危険だと言いたかったのはこういう態度のことだ。科学とは真実の追求であって、臆病者のお守りではないということ。判るか？」

学生たちはこっくりと頷いている。

「結構」彼は腕時計を見た。「おまけの雑談をしたのに、これでもまだ時間が五分余ったな。今日は急ぎ過ぎちゃった。まあいいか、ここまでにしよう。——それでは年が明けたら再会しよう、真面目な皆さん。いいクリスマス、いい正月を」

彼が腰を上げかけると、前列の女子学生の一人が「先生もね！」と叫んだ。助教授は微笑してちょっと片手を振ってみせる。

私は足元の旅行鞆を取って、教室裏の階段を早足で駆け降りた。

「お疲れ様」

教室を出てきた彼を捕まえて声を掛けた。学生たちの波が私たちを割っていく。

「よお、アリス。後ろの隅でちょこちょこメモをとりながら聴講していただいていたな。次の作品の参考になるようなことを喋ったかな、俺は？」

アリスというのは私のことだ。簡単に自己紹介をしておくことにしよう。——私の名前は有栖川有栖（ありすがわありす）。三十二歳。同年配の平均的サラリーマン並みの年収をからくも維持しているという程度の専業推理作家だ。二度とは言わないのでよく聞いていただきたい。日本に二つとないであろうこの名前は母親につけられた本名であり、伊達（だて）や粹狂（すいきょう）でつけたペンネームではない。そして、私の性別は男である。

「まあね。いつか使わせてもらうかもしれへん」

大阪生まれ大阪育ちの私の関西弁に、札幌生まれあちこち育ちの友人は歯切れのいい東京アクセントで応じる。

「お前はそういう貧乏根性でメモをとるわけか。なるほどな」

そう言って笑う助教授の名は火村英生（ひむらひでお）。私と同じ三十二歳。学内で最も若い助教授である。母校であるここ京都の英都（えいと）大学の社会学部で犯罪社会学の講座を持っている。ちなみに私も英都大学の卒業生で、彼とは学生時代からの付き合いだった。——今はこれだけに留め、彼がどういう人物なのかについてはおいおい説明する。

「そっちこそ旅行鞆提げでご苦労だったな。京都駅で待ってりゃいいものを」

私たち二人はこれから旅に出るのだ。彼が言うことはもっともなのだが、久しぶりに彼の講師ぶりを覗いてみたかっただけだ。

「行こう。俺もすぐ荷物を取ってくる」

彼はくるりと振り向いて歩きだしたので私は追いかけてながら言った。

「講義の続きは電車の中で聴かせてもらうわ」

「駄目だ」火村は足を止めて私を見た。「俺は真壁聖一（せいいち）の新刊を大急ぎで読むんだ」

「義理固いことで。ご苦労様やな、それこそ」

「人間、生きてる限り『お疲れ』で『ご苦労』なんだよ」

Translation 5

西村京太郎（にしむらきょうたろう）

天使（てんし）の傷痕（しょうこん）

「五年前、私は、時枝と結婚しました」

と、沼沢は、視線を落したまま云った。

「そして、六月後に、時枝は、自殺を図ったのです」

「ここでは、今でも、家の格式が、やかましく云われます。本家と分家の関係も、昔通り残っています。私の眼には、それが、とんでもない時代錯誤に見えたのです。ナンセンスに思えました。それに、さっきお話したように、農村の民主化も簡単だという錯覚も手伝って、私は、格式の違う時枝と結婚する気になったのです。ところが、猛烈な反対にぶつかりました。部落は、昔のままの部落だったのです。分家の人間は、こぞって反対しました。中には、時枝の指が二本短いことを理由にして、片輪の嫁を貰う必要はなかろうと陰口を云う者もいたくらいです。時枝は参ってしまって、自殺を図りました。睡眠薬を飲んで——」

「アルドリン？」

「そうです。時枝は、二十錠飲みました。しかし、死ねませんでした。死ぬには、不適當な薬だったのです。私は、ほっとしました。しかし、その時、時枝は、妊娠していたんです」

「それで、アルドリンの子を？」

「ええ。保健婦の腕に抱かれた赤ん坊を見た時、私は、眼の前が、真っ暗になったような気がしました。しかし、私は育てようと思いました。時枝が、反対したのです」

「時枝さんが？」

「そうです。母親である時枝がです。非道（ひど）い母親だと思いますか？ しかし、時枝には、農村で生きていくということ、この部落で生きていくということが、どういうことか、判っていたのです。私が育てようと考えたのは、正しくはあっても、この風土では、甘ったるい、空虚な感傷でしかなかったのです。理想や正義で、子供は育てられません。ここでは、土を耕やすことの出来ない子供は、生きる資格がないし、生きていけないのです。ここでは、子供も労働力ですからね。片輪の子は労働力にならない。生きる資格がないのです」

「生きる資格がない？」

「非道い云い方だとは判っています。しかし、それが現実だし、そう考えさせるものが、ここには、あるんです。子供だけじゃありません。老人でも同じことです。野良仕事の出来なくなった老人は、ここでは、存在価値がなくなってしまうのです。自分自身で、そう

考えてしまうものが、ここにはあるんです。それは、農村の貧しさかも知れないし、野良仕事の激しさかも知れないし、或は、落伍者意識を植えつけるものが、何かあるのかも知れません」

「だから、死んだことにしたんですか？」

「理由は、もう一つあります。私と時枝の結婚は、祝福されませんでした。出産の日にも、手伝いに来てくれた者はいません。その上、奇形児が生まれたとなったら、どうなります？ それ見ろ、罰が当たると云われるに決っています。片端の嫁を貰うから、片輪の子供が生まれたんだと云われるかも知れません。私は、堪えられたとしても、時枝は、堪えられないに決っています。だから、私も、時枝や、母に賛成したのです」

「しかし、アルドリン奇形の子が生まれたのは、貴方がたのせいじゃなくて、薬のせいじゃありませんか？」

「理屈は、そうです。しかし、人間が納得するのは、理屈ではなくて、感情によってです。それに、あの子が生まれた時は、アルドリン問題は、まだ、起きてなかったのです。薬のせいだと確信できる時でも、なかったんです。あの子を、周囲の眼から隠してしまうことが、最良の方法だったのです。保健婦も、すすんで、私達のために、死亡診断書を書いてくれました。あの人は、戦争未亡人です。今日まで女一人で生きてくる間、どれだけ中傷や、詰らない噂に堪えてきたか、私は知っています。今になっても、『戦死者の家』という標札がついていて、それらしく生きていくことを無言で要求するのが、この風土なんです。だからこそ、彼女も罰せられるのを覚悟で死亡診断書を書いてくれたんです。ここで生きていくには、そうすることが、一番賢明だと、知っていたからです」

「何故、それが、賢明な生き方だと、判るんですか？」

「そうして、生きて来たからですよ。誰も助けてくれなければ、自分のまわりに、固い殻を作って、その中で生きていくしかないんです。それから、はみ出す行為は、理屈の上では正しくても、してはならないことなんです。貴方は、時枝が、黙っていると云って怒りましたね。しかし、何か云って、それで、どうなんです？ どうにもなりませんよ。だから時枝は、黙っていたんです」

「しかし、何故、昌子さんだけが、犠牲にならなければならないんですか？」

「家が破壊されるのを防ぐには、誰かが犠牲にならなければならないんです。私であっても、時枝であっても良かったんです。昌子がいなかったら、私が、久松を殺していたでしょう。その場合でも、絶対に、秘密は明かさなかったでしょう」

「そんな考え方は、間違っている」

「そうかも知れません。しかし、他に方法はないんです。ここで生きていくには――」

「しかし、貴方は、間違っているんだ」

田島は、同じ言葉を繰り返した。返事はなかった。田島も、次の言葉を見失って、黙ってしまった。

沼沢は、いろいろと話してくれた。だが、田島にとっては、時枝や保健婦から感じた重い

沈黙と、同じものでしかなかった。

失望と怒りを背負って、田島は、その夜の列車に乗った。

東京に戻った田島は、是が非でも、昌子に会わなければならないと、思った。彼女の本当の気持が知りたかった。

田島の知っている昌子は、聡明な娘だった。古臭い因習や、封建的美徳を、はね返せる気性の持主の筈だった。

金網越しに会った昌子は、蒼ざめてはいたが、落ち着きは失っていなかった。

昌子は、田島を見て、微笑した。

田島は、早口で、すべてを話した。岩手に行き、時枝や沼沢に会ったことも、多摩療育園を訪ねたことも。

「僕には、今度の事件の本当の姿が、判ったんだ」

と、田島は云った。

「君が、家の秘密を守るために、犠牲になる必要はない。本当のことを、何もかも話すんだ。そうすれば、君は、軽い刑ですむんだよ。久松の場合は、一種の正当防衛だという論もできる。管理人の場合にも、君に殺意がなかったことを証明するのは、そう難しくはないんだ。君は、姉さんが、アルドリンで自殺を図ったのを知っている。アルドリンが、殺人には、ふさわしくない睡眠薬であることを、知っていたことになる。つまり、脅かす積りだったが、殺す気はなかったことに出来るんだ。本当のことを、君が話せば」

「———」

「君が、田熊かねに、アルドリンを使ったのは、自分を、追いつめたものへの抗議の気持があったからなんだろう？ それなら、あくまで、その気持を貫くべきじゃないか。裁判の時には、本当のことを、堂々と云うのが——」

途中で、田島は、言葉を呑み込んでしまった。

眼の前の昌子が、彼の知っている昌子ではなくなっていたからである。明るい、都会的な昌子の顔ではなくなっている。田島は、狼狽した。今、彼の前にいるのは、岩手の雪の中で会った時枝や、保健婦と同じ、能面の顔の女だった。柔らかい蒲団で育った娘ではなく、エジコで育った娘が、そこにいた。田島の知っていた昌子は、何処へ消えてしまったのか。

昌子は、押し黙っている。

田島の狼狽が深まった。昌子のために悩み、彼女と一緒に苦しんでいたという自負は、自分の勝手な、ひとり合点だったのか。

(貴方は、傍観者だ)

と云った沼沢の言葉が、彼の脳裏をかすめた。昌子の眼にも、自分は、第三者としか映っていなかったのか。

「何か云ってくれ」

と、田島は、大声で云った。だが、昌子の口は、ひらかなかった。昌子は、一体、何を考

えているのか。自己犠牲に酔っているのか。

「君は間違っている」

田島は、乾いた声で云った。

「君も、君の姉さんも、君の義兄さんも、沈黙していれば、どうにかなると思っている。だが、君達は間違っているんだ。黙っていたら、何も解決されないんだ」

田島は、重い疲労を感じた。その沈黙の壁は、打ち破ることが出来ないのだろうか。

新聞に、真相を発表したら、どうなるのか。間違いなく持ダネだ。だが、それでは、昌子達を、より深い沈黙に、追い込んでしまう恐れがあった。

昌子達に、すすんで、真実を話させるようにしなければならない。だが、そんなことが可能だろうか。

Translation 6

梅原 克文（うめはら かつふみ）

二重螺旋（にじゅうらせん）の悪魔（あくま）（上）

過去 e 最初の対決

「ちくしょう！ 則之、返事しろ！」

おれはジュネトリック・イノベーション社の P3 施設の中で叫んでいた。マスクのせいで、声はくぐもっている。

返事はなかった。

血で描かれた、わけの分からない前衛芸術的な絵文字の落書きの中を歩いていた。足の筋肉が陶器にでも変わったような歩き方をしていたらう。

足が止まる。

左側の手前から三つ目の戸口、今そこから床に多量の血が流出し始めていた。おれのスリッパの先端が、赤い液体に触れる。

おれの位置からでは、まだ戸口が死角になるため、流血事件が起きている実験ブロックの中が見えない。

自分の呼吸音が耳障りだった。それを押さえようとするのだが、日本列島に上陸しようとする台風を止めるのと同じくらいに困難だった。

思い切って、スリッパを一步進める。血溜まりの中に足を突っ込んでいた。

視角が変わり、実験ブロックの中が見えた。

息が止まる。

そこは各種バイオセンサーの実験に使われているブロックだった。酵素センサー、微生物センサー、免疫センサー、オルガネラ・センサー、LB（ラングミュア・プロジェクト）膜などなどが、試験管やシャーレ、スピナー瓶に収められている。

おれは、このブロックで実験を担当している関和彦（せきかずひこ）という同僚をライバル視していた。特に LB 膜の研究は光スイッチ素子や有機超電導体につながる将来性があり、次世代ハイテクとして有望視されているのだ。

関和彦は、もうおれのライバルではなくなっていた。床に仰向けに倒れて死んでいた。ペール・ブルーの実験衣は紅に染まっている。

予想に反して、彼は吐血していない。出血は、首や胸についた傷口からのものだったのだ。刃物による鋭利な傷ではない。誰の眼にも明らかな歯形が残っていた。獣に身体（からだ）中を喰い破られたような有様だ。天井にも壁にも、血が飛び散っている。

おれは悲鳴を上げた。後ろに飛びのく。スリッパが血で滑って転びそうになった。

この状況は、どう見ても関和彦が野獣か何かに襲われたものとしか結論の下しようがない。

想像していたものとまったく異なる光景に遭遇して、おれは完全に混乱していた。

「あれは・・・・・・・・歯形？ 歯形なのか？」

よく見ると、関和彦の身体に残った歯形は、かなり小さかった。大型肉食獣、例えば熊やライオンなら、もっと大きいはずだ。人間の歯形だって、こんなに小さくはない。歯形を残したモノの正体はまだ判らないが、意外と小さな生き物だ。

＜生物災害（バイオハザード）＞の可能性は、かなり減った。同僚たちは病死したのではなく、何らかの生き物に咬（か）み殺されたらしい。

おれの大脳前頭葉が活動を開始した。

生き物？

「まさか!？」

イントロンから呼び出した、あの謎のゼラチン生物!？

「まさか!？ あれが!？」

おれは、バイオリアクターのある P3 の奥の方向を見た。この位置からは、廊下の両側に七つずつ、計十四の戸口が見える。そのうち、二つのドアが開いている。残りのドアはすべて閉まっていた。

おれと阿森則之が実験に使っていたブロックは、右の奥だ。やはり、ドアは閉まっている。

則之もそこで喰い殺されて、無残な死に様をさらしているのか・・・・・・・・。

辺りを見回す。関和彦の死体が横たわるブロックには内線電話があった。床に溜まった血液を踏んで、そのブロックに入った。吐き気を堪えるのに苦労した。受話器を取り上げる。内線 028 をダイヤルした。

「はい、管理 1 グループです」

若い OL の声が答えた。彼女は月坂啓子という太めの女の子で、かなりきついダイエットをしているのに効果がない、という噂を聞いたことがあるが、今はそんなことはどうでもいい。

口を覆うマスクを下にずらした。

異臭に顔が歪（ゆが）む。

「はい？ どなたですか？ もしもし？」

おれは呼吸を整えてから言った。

「P3 にいる深尾だ。緊急事態だ。＜生物災害（バイオハザード）＞かもしれない」

「え？ なんて言ったんですか？」

おれは同じセリフを繰り返した。電話越しでも、相手が緊張するのがわかった。

「確かですか!？」

「まだ、はっきりしない。とにかく、P3 は立入り禁止にしろ」

電話を切った。これで犠牲者が今よりも増えることはないだろう。

戸口から半分だけ顔を出し、則之がいるはずのブロックを見た。彼が活着ている可能性は期待できそうにないだろう。

おれもここを生きて出られるかどうか・・・・・・恐怖が心臓の鼓動を速めた。

今すぐ、逃げよう。なぜだか分からないが、P3 内部の同僚たちを殺した奴は、さっきからまったく姿を見せていない。きっと、おれは運がいいんだ。今なら逃げられる。そして P3 を閉鎖して、それから対策を考えればいいじゃないか。

同時に、罪の意識と責任感が、おれの魂を緊縛し始めた。もし、則之がやはり咬み殺されていたら、それは誰のせいだ？ 己の野望のために、イントロンの謎を力づくで解こうとしたのは、どこの誰だ？

「いや、落ち着け。まだ、おれのせいだと決まったわけじゃない」

そう言ったが、おれの反論は弱々しかった。

いずれにせよ、何があったのか確かめなくてはならないのだ。危険を冒してでも、そうするべきだ。おまえには、その責任があるぞ。

・・・・・・そうだ。武器はないか？

そばのテーブルの吸湿マットには手術用具が一式揃（そろ）っていた。解剖用メスと、注射器を掴む。麻酔薬のアンプルを見つけて、注射器に中身を注入した。

心もとない武器だが、ないよりはましだ。

おれは鮮血に染まったブロックを出た。左足を踏み出す。血に濡（ぬ）れたスリッパがベチャッと、いやな音を発する。

そこからの一步一步は、時間が無限大にまで引き延ばされているようだった。さっきまで、自分がいた世界、サラリーマンや OL たちの世界が遠ざかっていく。おれは生きながら地獄巡りの観光旅行をしているのだ。

開き放しのドアに差しかかった。戸口から、実験ブロックを見た。ほぼ予想通りの光景に出会った。

細胞間マトリクスを研究していた、吉田政幸がいた。カラスがさんざんつつき回した残飯のごとき有様になっていた。もう、それ以上は描写したくない。

内線電話のベルが鳴り出す。その音に、おれは飛び上がりそうになる。外部の誰かが心配して、電話してきたのだろう。だが、今は出ている暇がない。

ついにおれは、専用ブロックに辿り着いた。えらく時間がかかったようだが、実際は三十秒も要していないのだろう。まともな時間の感覚はもうなかった。

ドア・ノブに左手をかける。

また膝が震えた。パニックが、闇雲（やみくも）に走って逃げろ、と叫ぶ。それを押さえ込む。ドア・ノブを回した。

もしかすると、このブロックには則之だけでなく、謎の惨殺犯人も同席しているかもしれない。そいつと鉢合わせする可能性が高いだろう。おれは手にしている解剖用メスと注射器を確かめる。

内線電話のベルが鳴り止んだ。

静寂の中、おれはドアを開いた。

何も襲ってくるものはなかった。

実験ブロックは、**a** 室と **b** 室の二部屋に分かれている。**a** 室は廊下と直通の実験作業区画、**b** 室は **a** 室の奥にあるバイオリアクター区画だ。

a 室と **b** 室は、スチールの枠にはめ込まれたアクリル窓と、スチール・ドア付きの戸口で隔てられている。

則之は **b** 室にいた。

則之は壁に背中をもたせかけて、床に座っている。頭は前に垂れ下がっていた。両腕もだらしなく、自分の太ももに置かれている。ペール・ブルーの実験衣は血で汚れている。だが、ひどいケガをしているようには見えない。

「則之！」

周囲を見回す。このブロックには我が親友一人しかいないようだ。

アクリル窓越しに見える、例のバイオリアクターに視線が留まる。

おれは不審な表情を浮かべていただろう。

銀色のタンクの蓋（ふた）が少し開いていた。その隙間（すきま）から薄いピンク色をしたヒモ状のものが伸びている。それは床を這（は）い、則之の方に伸びているようだ。

「則之！」

b 室に飛び込み、駆け寄った。

「どうした！？ 何があった！？」

則之の肩を掴み、揺さぶる。手袋越しに彼の体温が感じられた。かすかに胸が上下している。彼の呼吸音も聞こえた。

則之の顎（あご）を持ち上げ、覗き込む。

「則之！ 何があった！？」

則之の眼は虚（うつ）ろだった。ボストン・メガネのレンズ奥で、黒い瞳が少し動いた。口を動かす。何か言おうとしているらしい。

おれは耳を、則之の口に近づける。

「・・・・・・・・逃げろ」

彼は確かにそう言った。

Translation 7

瀬戸内寂聴（せとうちじゃくちょう）

髪（かみ）

背中をむけあって、夫婦は球根を埋めつづけていた。卓也が一つ埋める間に、弓子は四つか、五つ埋めてしまっている。弓子が赤い袋を受持ち、卓也は青い袋を持たされている。

弓子は例によって凡帳面（きちょうめん）に、チューリップの花が咲き揃った時のデザインを方眼紙に描いて、庭に置き、石を載せてある。メリケン粉で線を縦横に引き、頭の中には赤と白のチューリップの花の整然と咲き揃う図柄が、収まっているらしい。

ふたりの尻（しり）がぶつかりあった。あらと小さく笑って、弓子はもう一度わざと尻をぶつつけてきた。それにしても、こんな悪戯（いたづら）をする閑人（ひまじん）は、どこの誰だろうと卓也は考えていた。

女たちの笑顔や泣顔が、掘りかえした匂いのする土の上を通り過ぎていく。どの顔からも、こんな大仕掛な悪戯をしそうな余裕はなさそうだった。詩人の、ボードレールの写真のように眉間（みけん）に皺（しわ）を刻んだ、斜め横向きの写真顔が浮んできた。いつか、ガンで入院しているという噂（うわさ）を聞いたような気がする。まだ死んだとは聞かない。

自分の周囲からでないとするれば、弓子の関係からだろうか。弓子は機械的にシャベルを動かしてつづけているが、今、何を考えているのか。自分の心にくつつもの扉があるように、単細胞だと思っていた弓子の心にも、自分の知らない扉がいくつかあったとしても不思議ではない。素透しだと思いこんできた弓子の心をまともに覗いてみると、卓也にはふいに磨硝子（すりガラス）のような不透明なものが見えてきて心が疎（すく）んだ。

「休むよ」

事実、中腰でこれ以上いられないほど腰が痛んでいた。三十も埋めてはいない。

「どうぞ、どうぞ」

弓子が晴れやかな声をあげる。

卓也は尻ポケットから煙草（たばこ）をひきだしながら、ベランダのロッキングチェアに寝そべった。

弓子はいつ髪を剪（き）ったのだろう。長い柔らかな髪は弓子の自慢のひとつだった。うつむきこんでピンポン玉くらいの大小不揃いの茶色の球根を埋めつづけている弓子の衿足（えりあし）が、すっきりと刈りあげられ、まだそこに思いがけない初々（ういうい）しい若さの残っている衿足が、透明な冬の陽ざしにまぶしく映った。

雲のない空を見上げた後、首の後ろに掌（て）を組んで卓也は瞼（まぶた）を閉ざした。瞼の裏に、今、見つめていた空よりもっと碧（あお）いきらめきにみちたイスラエルの空が拮（ひろ）がってくる。

二十一の青春はもはや遠く過ぎ去ってしまった。弓子の衿足のような若さが、自分の肉体のどこにかくされて残っているだろうか。

イスラエルの丘の上の五百本のオレンジの樹を任されて、毎日五十本の灌水（かんすい）ホースを操作しつづけていたあの作業が、生涯で唯（ただ）一度園芸にたずさわった時期だった。およそ興味のない草木の世話を望んだのは、そうして点を稼いで一日も早く内勤に廻されることが目的だったのだ。実際、人より半年も早く内勤になった。

退屈で相当な重労働の灌水より、もぐら打ちが面白かった。不意に急高圧のポンプの水を、ホースから樹の根方の土に叩（たた）きつけてやると、面白いほど地中のもぐらが空中にいっせいに飛び上り、その瞬間に、目を廻して落ちてくる。気絶したもぐらを拾って背負い籠（かご）に移すまでが一工程の作業だった。灰色のボールのようなもぐらが勢いよく空中に飛び上り、我勝に落ちてくるのは、一種のユーモラスな壮観だった。

シモーヌ・・・・・・・・名を胸につぶやくだけでよみがえる青春の匂い。喘息（ぜんそく）持ちの老博士は、若い妻と、長髪の東洋の若者との恋を、見て見ぬふりをしつづけた。金髪をかきわけ、細い衿足に接吻（せっぷん）してやると、フルーツのような声をあげる女、シモーヌ。ふたりでシモーヌの故郷のノルマンディに逃げた。朱（あか）い雛罌粟（ひなげし）の花盛りで、なだらかな村の丘はどっちをむいても炎をあげているように見えた。花の炎に染まったシモーヌの蒼白（あおじろ）い軀（からだ）の芯（しん）にも火の柱が走った。離婚したという便りが転々と付箋（ふせん）をつけてようやく届いた時は、もう洋子が生れていた。

ひとりで十余年ぶりで訪れたキブツの丘に、あの時のオレンジの五百本の苗木が卓也を見下すほどに育っていて、たわわな黄金色のつぶらな実を、濃いつややかな葉かげに実らせていたのを見た時の、全身の震えるような感動がよみがえってくる。臉に涙がふくれ上ってきて、オレンジの実が金色の漂う波になってゆらめいていた。灌水の虹（にじ）の下から手をあげて駆けよってきたシモーヌ。

特徴のあるハスキーな声に眠りを覚された。厚化粧すぎてお面をかぶったような寺尾美香が、垣根を飛び越えていた。夢の中の雛罌粟の咲き揃（そろ）った鮮かな影像がまだ目の中に残っていて、風に揺れるチューリップの花群の影と重なった。卓也はふと、女のエメラルドグリーンジャンプスーツの姿を、昆虫のように思った。

「だめだったわ弓子さん、老人ホームで断られちゃった。もう畠（はたけ）はすっかり野菜の種蒔（たねまき）が終って、花を植えるゆとりはありませんって・・・・・・・・それから港へ廻って、船の人にあげようとしたけど、やっぱり断られちゃった。チューリップを咲かせた船なんて漫画だよって」

弓子と美香の高い笑い声が、あたりに響いていく。

卓也は眠ったふりをよそおい、臉にもう一度、花盛りの丘の中に佇（た）つ女の姿を呼びもどそうとした。シモーヌ。

Translation 8

柁悟郎（まさきごろう）

ヴィーナス・シティ

二〇面体のダイスは、歪みがこないように金属でできている。前回わたしに負けたジャムが、はじめにそれを振った。

十五。

続いてわたしが振った。金属のダイスの冷たい感触。目は十七だった。ジャムがフツと笑った。わたしが先手になることが決まった。ジャムはそれを喜んでいるのだ。幽霊ダイスでは、後手が有利になることも多い。

「それでは、始めよう。サキとジャムの勝負だ。では、ふたりとも感覚インプットの遮蔽を開いて」カット・ラインが場を仕切った。わたしは自分の感覚コントロールをオープンにした。これでわたしの全感覚は、勝った奴の思い通りになる。人前で全裸になった乙女の気分がした。

わたしが先にダイスを振った。目は七だった。「いけ、いけ！」とブレーカーが小さく叫んだ。ジャムが続いて振った。

目は十二だった。

「悪いね、お婆ちゃん」ジャムは言って、とても薄く笑った。「これで、どうだ！」

いきなり衝撃がわたしの全身を襲った。背後の世界の物音が、突然数デシベル下がった。同時に、急激なめまいがし、わたしは一瞬バランスを失った。さすがにジャムは TRB のメンバーだけのことはある。何がもっとも相手に被害を与えるかを熟知している。その一撃が、わたしの聴覚を、正確に一目盛り分だけ世界から切り離れた。それだけではない。聴覚への打撃は、同時に三半規管への衝撃となり、激しいめまいが襲ってくる。つまり現実には、二目盛り分の打撃になるのだ。わたしはわずかに喘ぎをもらした。

幽霊ダイスの醍醐味は、相手の感覚を、ひとつひとつ入念に潰していくという残忍な喜びだけではない。人間の知覚に関する正確な知識の裏付けこそが、この賭の勝敗を制する。そのためには、自分自身の感覚系統についても、詳しくその設計図を検討しておく必要がある。知識と運と精神力。三つの要素が不可欠な、高度な賭だ。

わたしはジャムの気迫をひしひしと感じた。いきなりの三半規管への攻撃だ。前回のことをよほど根にもっているのだろう。だが、その攻撃は、同時に自分の身を危険にさらすものでもある。先制攻撃は、後手に簡単に真似されてしまうからだ。

わたしはクラクラする頭を押さえて、ダイスを転がした。

目は十八だった。

ほとんど間をおかずに、ジャムがダイスを振る。目は六だ。

わたしはジャムのどの感覚を、一目盛り減衰させてやろうかと考える。三半規管への攻撃

は、すでに予想されているだろう。それだけに、与える心理的なダメージも小さい。ならば、ここはどうだ？ わたしは脳裏に感覚インプットの配置図を描いた。そしてジャムの体性感覚を攻撃した。

ジャムが小さく悲鳴を上げた。反射的に、片手の鋭い爪が、真紅の革製ビスチェの胸元を掻きむしる。わたしの喉の奥深くに笑いがこみあげてきた。

体性感覚への介入は、たとえわずかなものであっても、相手の皮膚に、言いようのない搔痒（そうよう）感を与える。とてもバランスが微妙なのだ。全身に鳥肌が立ち、裸でムカデの群に投げ込まれたような感覚に襲われているはずだ。ざまをみろ！

「て、てめえっ！」息を押し殺してジャムが言った。ビスチェの上、鎖骨あたりの肌に、赤い爪あとができていく。はりつめた沈黙が周囲を包んでいた。その沈黙の中に、ひどく遠くからエミコの静かな声が聞こえる。

「いらっしゃいませ」そして視界の隅を、新しい客の姿がよぎる。若い女で、連れはいない。わたしは黙ってダイスを転がした。

目は二〇だった。

「くうっ」ジャムが低くわめいた。他の TRB のメンバーたちの緊張が、こちらにも伝わってくる。ブレーカーが大きく息を吸った。

続いてジャムがダイスを転がした。

目は三だった。

「さあ、お次はどこがいい？ え、この腐れ雌豚野郎が」わたしは低い声で言った。ジャムはすでに目を閉ざし、次にくる衝撃にそなえて、身体を固くしている。濃いメイクで覆われた陰のある童顔に、わずかな震えが走ったのをわたしは見逃さなかった。背筋を快感が走り抜ける。こういう時だ、幽霊ダイスの醍醐味が満喫できるのは。サディスティックな陶酔が、わたしの喉の奥に、酸っぱい唾液のようにこみあげる。わたしは心理作戦を取ることに決めた。

「——さあ、ここか？」ジャムの聴覚をなでまわす。ジャムがぶるっと震えた。

「——それとも、ここか？」今度は網膜に感覚攻撃の指を走らせる。ジャムのくちびるがわなないた。身体がなけば硬直している。ボックス席を強い緊張が支配していた。ステンレスの刃のような緊張だった。

「どうした？ 口ほどにもないじゃないか、ええ？ それとも、ここにもう一発……」そのときだった。おさだまりの夜の楽しみが終わりをつげたのは。

いくつかのことが一瞬に起こった。まずは悲鳴。エミコの悲鳴だった。聴覚が減衰されているので、それはひどく遠くから聞こえた。

「誰か！」とその声は聞こえた。わたしたち全員が我に返り、声の方角を見やった。

ストールに若い女の姿があった。さっきの新顔だった。長い黒髪と、白銀のローブが目をつけた。遠目にも印象的な顔立ちだった。日本人形のような顔立ち。整っていると言ってもいいはずだ。もしもその口が、驚きに大きく歪んでいなければ。

娘に覆いかぶさるようにして、大きな影が立っていた。その片手が振り上げられる。手の中で、何かが閃いた。銀のスティレットだった。影は何ごとか声をあげているようだった。腕の筋肉に力が加わり、銀のスティレットは大きな弧を描いて、娘の喉元へ振り下ろされる――。

ストップ・モーシヨンの芝居をみているようだった。わたしは即座にテーブルの上に目を走らせた。スチールの大きな灰皿が目についた。即座にそれを握り、襲撃者めがけて投げつけた。

ほうっ、と TRB の誰かが声を上げた。ふたつの予期しない出来事が起きたからだ。投げられた灰皿は、襲撃者の身体をそのまま素通りした。だが、スティレットには命中し、それをカウンターの上へ打ち飛ばした。

娘にのしかかっていた黒い影が、動きを一瞬停止した。それから、くるりはこちらを向いた。カウンターの照明を背後にして、その影はあくまで暗かった。ただ、その両眼だけが、見覚えのある真っ赤な輝きを放っていた。わずかな混乱と、いっそう大きな憎悪にみちたまなざしだった。

「賭は中止だ。感覚をもどせ」わたしは言って、立ち上がった。ほとんど同時に、遠のいていた聴覚が正常に戻った。

黒い影が一步こちらに踏み出した。暗がりの中から踏み出した脚は、長く、そして鏡の銀色をしていた。輝く腰と胸が現われ、最後に銀色の頭が影の中から出現した。真紅の両眼がこちらを凝視している。うつむき加減の頭部に、わたしの歪んだカリカチュアが反映していた。銀細工の背後に、口を歪めたままの長い髪の娘の姿が一瞬だけ見えた。

「――邪魔をするな」剃刀のような声だった。その声がわたしの耳を刺した。そして銀細工のコンコルドは、フッとわたしの目前から消えた。

奴は加速している。わたしは一瞬虚をつかれた。この街で加速を使う奴に出会ったのは、これが初めてだった。

だが、わたしも加速には多少の心得があった。即座に反応速度を上げていった。二倍、三倍……五倍でようやく銀色の閃光が視界の片隅に入り、十二倍でようやく同じほどの速度に迫った。耳の奥でカン高い音がして、周囲の音声はまるで聞き取れなくなった。

何者だか知らないが、このコンコルドはとてつもなく速い。エミコの凍てついた姿が見えた。コンコルドは、その傍らを越えてカウンターの内側に飛び込み、スティレットを片手に飛び出してきたところだった。口を大きく開いたまま動かない娘を一瞥した。続いて赤く燃える瞳がわたしを捉えた。わたしも加速していることに気づいて、「ムウ」と低く呟いた。動きが一瞬ゆるんだ。

このコンコルドにしても、加速を使える相手にでくわすのは予想外のことだったのだろう。普通この街の連中は、加速処理になど大して関心を払ってはいない。加速なんか使うのは、よほどのマニアか、でなければ特殊な目的を持った奴だ。どうやら後者に思われた。

銀色のコンコルドとわたしは、静寂の中で、わずかの間だけ睨みあった。二秒間をかけて、

標準時間の〇・一六秒が過ぎた。加速されたコンコルドの思考が、何事かを謀っているようだった。

そしてコンコルドは、くるりと向きを変えた。次の瞬間には、銀細工の姿は、フッと店内からかき消えていた。同じボックスにいた残りの連中が、後を追うようにして出口に向かう。おそろしく緩慢な動作だ。こいつらには加速装置が付いていない。

そのうちの一人を捕まえるのは至極たやすいことだった。ラバー・ボンデーの大男。その腕をつかんでひきずり倒し、そのまま TRB のボックスに投げこんだ。そして、悲鳴の口をおそろしくゆっくりと閉ざしつつある娘の前に移動した。

そこで加速を切った。

標準速度に戻ると、室内の音声が、わたしの耳を再びつんざいた。喉の奥からしぼりだすような娘の悲鳴だった。この娘の目からすれば、いきなり襲撃された後、襲撃者が不意に見えなくなり、そしてその場所に今度はわたしが突然姿を現わしたことになる。悲鳴が続いているのも無理はなかった。

「……………サキ。あんた、何者なの？ 加速なんておかしなワザを使って？」背後のボックス席から、押し殺した声でジャムが言った。

「個人的な事情ってやつだよ」わたしは答えた。そして娘に向きなおる。

長い黒髪影にかくれていたのは、透き通るような白磁の肌をした、人形の顔だった。純白の肌に、とても日本的な切れ長の目。小さな整った赤いくちびるから、安堵の吐息が静かにもれた。事情を察したのだ。だが、先細りの小さな掌は、相変わらず固く握りしめられたまま、無意識に自分の大腿を叩き続けている。極度の緊張にともなう不随意反応だった。わたしは、この娘が着ている白銀のローブが、おそろしく高価なブランド物のオリジナルだということに気づいた。それを言うなら、この娘の身体自体、おそろしく金のかかったものだ。この娘は、どんな種類の金であれ、金には苦勞していない。わたしはそう思った。